したといふ。しかし常光大師傳錄に、富樫孚山淨祐居士十三年忌弟滿家謂と題した香爐があつて、その孚山淨祐は昌家のことであるから、應永六年に尙滿家が生存してゐたわけであり、昌家の後は滿家か或はその子の滿春が繼いだのであらう。

トガシミツナリ 富樫滿成　滿成の系圖は明らかでない。幼名香幢、後に兵部大輔と稱した。應永廿一年六月八日富樫滿春と共に加賀守護となり、一時將軍足利義持の信任を得、廿三年十一月前將軍義滿の遺子押小路大納言義嗣の不軌を圖らうとした時、之を林光院に幽するに及んで、俄かに勢力を得、廿五年正月廿五日遂に林光院を火攻して義嗣を殺した。然るに幾くもなく滿成が義嗣の妾林歌局に艶書を送つたことが露れて、義持の怒に觸れ、十一月廿四日京都を脫して高野に入り、次いで吉野に轉じ、翌年二月四日畠山滿家の爲に誘殺せられた。

トガシミツハル 富樫滿春　滿家の子。應永廿一年六月八日滿成と共に加賀守護に任ぜられたが、廿五年十一月滿成の失脚した後は獨將軍の信任を得、義教及び義持が屢その邸に臨んだことが記されてゐる。滿春晩年佛道に耽り、館中に禪堂を設け、法名を勝蓮寺常繼といつた。同三十四年六月九日卒。

トガシモクエ 富樫默惠　眞宗東派の僧。諱は讓、巖谷と號した。文化三年江沼郡大聖寺町に生まれ、天保十年山中燈明寺十五代に住し、高倉學寮に學び、十四年寮司となり、安政三年擬講に進み、慶應元年嗣講となり、瑞應院と稱し、明治の後二等學師となつた。同十年七月十二日寂、齡七十二。著す所に破邪編四卷がある。

トガシモチハル 富樫持春　滿春の子。應永三十四年六月父の死後家を繼いで加賀介となり、爾後將軍足利義持及び義教は屢その邸に臨んだ。永享五年閏七月十日持春廿一歲を以て卒し、法名を福嚴寺常永といつた。

トガシモモノキハタケヤマフ 富樫桃井畠山譜　二册。富田景周著。加賀の領主富樫氏、越中の桃井氏、能登の畠山氏三家の譜であるが、未定稿である。

トガシヤスアキ 富樫泰明　通稱次郎。元應二年三月八日加賀の守護として白山宮に神拜したことが、白山宮莊嚴講中記錄に見える。泰明は富樫氏の系圖で家春の次に來る者であるが、その間に多くの年所を隔てるが故に、或は家尙を以て充たすべきものであるかも知れぬ。

トガシヤスイヘ 富樫泰家　家經の子で、兄家直の後を繼いだ。嘉永二年源義仲が北陸道を經て京に上つた時、泰家之に從うて功があつた。然るに幾ばくもなく義仲は賴朝の討伐を受けて粟津に敗死したから、泰家は鎌倉に歸服し、國に就いて蟄居した。旣にして文治元年賴朝の諸國に守護地頭を置くや、泰家召されて左衞門尉に任じ、加賀の守護に任ぜられた。

トガシヤスタカ 富樫泰高　滿春の子。敎家の弟。通稱小三郎。その諱を安高に作るものは非である。嘉吉元年六月敎家は將軍足利義敎の意に忤うて京都から亡命し、義敎は三寶院の喝食であつた慶千代卽ち後の泰高に家を襲がしめることにした。然るに敎家の舊臣はその嫡子成春を奉じて之に從はず、遂に文安四年五月泰高は加賀の南半を、成春は北半を領し、二人共に富樫介と稱することを定めて妥協した。しかも成春はその後失政に因りて野、市を逃走し、長祿二年舊領を赤松政則に賜うたが、成春の遺臣は嫡子政親を擁し、文明中に至つては赤松氏の所領を奪うて富樫介と稱したのみならず、將軍義尙の信任最も厚きを得たので、泰高は己の地位を維持する爲本願寺門徒と提携し、長享二年遂に政親を石川郡高尾城に滅ぼした。泰高は初め能美郡御幸塚に居たが、是に至りて父祖の居館野、市に移り、延德元年を以て歿したと せられる。法名瑞光寺眞幸。但しこの歿年に就いては疑がある。何故なら石川郡善性寺文書永正元年三月五日の安堵狀に、『任眞幸御寄進之旨永不可有相違者也。』とあつて、その眞幸の寄進狀は明應八年九月晦日のものを指すのみならず、同九年十一月十三日幕吏の執達狀に富樫介入道として、尙その生存したことを知り得るからである。蓋し延德元年はその隱棲した年でもあらう。

トガシヤスツナ 富樫泰繩　天文日記五年閏十月十九日の條に富樫小次郎代始祝儀のことが見え、同書宛名留には小次郎の諱を泰繩とせられる。この小次郎は後の晴貞のことであるから、隨つて泰繩は晴貞の初諱である。

トガシヤストシ 富樫泰俊　父は祖泰。享祿二年本願寺の家宰下間頼秀等加賀に來り、宿老と不和を生じて戰うた結果、四年宿老等大に敗れ、之と舊緣のあつた祖泰は泰俊と共に越前に逃れ、金津城主溝江大炊介長逸に寄つた。後天正二年金澤御坊の杉浦壹岐等越前に進擊し、先に織田信長を助けた長逸を攻め殺した時、泰俊はその子祖春(法名宗珍)及び天易侍者と共に皆自刄した。泰俊時に年六十四。

トガシヤスナリ 富樫泰成　泰高の子。長祿二年申次記に將軍の御供衆とし、永享以來御番帳文明十二三年の頃に御相伴衆とし、官は中務大輔に任ぜられたが、文明末年父に先だちて歿し、智識院慈顯と謚せられた。之を以て泰高の後はその養子祖泰が襲いだ。

トガダイガク 梶大學　越前の人。初め朝倉氏に仕へ、天正中前田利長に臣事し、後大坂の役に御馬廻頭として從ひ、その後役には千貫矢倉下で首一つを獲、祿遂に二千五百石に至つた。天和三年歿。子孫世々藩に仕へる。

トガタニ 鴉ヶ谷　能美郡白山下に屬する。享保五年の書上に、昔は十ヶ谷と書いたが、貞享三年の頃から鴉ヶ谷に改めたとある。附近石炭を出すが良質でない。明治廿一年の白山遊記に、『嘗聞距二村居一廿五町餘。新出二石炭一。其坑有レ三。近時已鑿二採取之業一。所レ得漸多云。其狀無二定形一。而薄片相重。以爲レ塊。然脆甚。』と見える。

ドガタニヤマ どが谷山　鳳至郡宮地部濟の北方に在る山。高さ二五五米。地質第三紀層。

トガナガヨリ 梶長頼　通稱又吉・源五左衞門。寶永三年兄清吉長堅の後を襲いで三百石を領し、享保九年大小將横目となり、十四年御横目に進みて百五十石を加へ、十五年三月三日五十四歲を以て歿した。

トガリジンジヤ 刀何理神社　江沼郡小鹽にあつた。式内等舊社記に、『刀何理神社。式内一座。小鹽村鎭座。今稱二白山一。舊傳云。往